

eye

村の収穫祭で「婿募集」の紙を張って踊る小佐田さんの姿に、会場は笑いと拍手に包まれた。1年間の期限で4月に移住した小佐田さんは、その後も村に残ろうと決めている＝11月



ギンナンを収穫する坂下さん(左)と曾根イミ子さん。イチヨウの木は村の人が移住者の生計の足しにと、山に植えたものだった＝11月



地域に伝わる伝統芸能「あわせおけさ」を収穫祭で披露する「地域おこし協力隊員」の多田さん

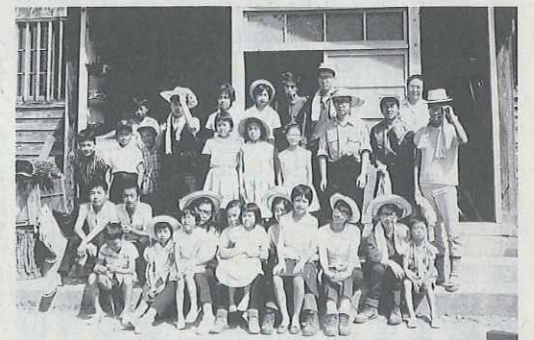


夢を語る集落 新潟・池谷から

手携え 未来へ

廃校となった旧十日町市立飛渡第一小池谷分校の前に並ぶ(前列左から)曾根武さん、庭野ヒサさん、曾根さき子さん、小佐田美佳さん、多田美紀さん、(中列左から)曾根藤一郎さん、曾根イミ子さん、(後列左から)多田朋孔さん、庭野功さん、坂下可奈子さん。分校には現在、坂下さんと小佐田さんが暮らす＝12月

1965年ごろに撮影された同分校の児童らの写真。村に残されていたもので、当時はまだ子供も多く、元気な声が聞こえてくるようだ



都会から若者たちが移住し、限界集落を脱した池谷(新潟県十日町市)に再び到来した厳しい冬。ちらほらと降り始めた雪が根雪となり、集落は白銀にすっぽり覆われた。村では今月、ボランティアアラの受け入れ組織「十日町市地域おこし実行委員会」のNPO法人化に向けた設立総会が開かれた。集落にはこれ以上の移住者が暮らせる住居がなく、年明けに新たな移住者のための集合住宅の建設を急ぐことなどが確認された。

池谷を訪れるボランティアとの交流会などが開かれる集会所の片隅には、「5年後の池谷」と書かれた模造紙が張られている。2年ほど前、村の存続を目指す人たちが集まり、それぞればらばらだった思いをまとめて共通認識を持つと、一晩考え合った。来る新規移住者と高齢化する村人たちの集合住宅。村で取れる野菜などを生かした加工品作り。集落営農に向けた村組織の法人化……。未来予想図に描かれた全てが今、当初の予測を上回るスピードで形になりつつある。「津倉」の屋号で呼ばれる曾根武さん(75)は「村が存続に向かってまとまったのは、それだけ追いつめられていたから。中越地震後に受けた支援で『よそ者をなかなか受け入れない』池谷の空気が変わったのさ」と教えてくれた。

写真・文 森田剛史

来週の「eye」は休載します。次回は1月5日です。



今年初めて深く積もった雪に覆われた池谷集落＝12月

新旧村民のひとこと

▽同「津倉」の曾根武さん(75)「今までは不安を抱えながら暮らしてきたんですが、今は希望を抱えて生きている」
▽屋号「橋場」の曾根藤一郎さん(75)「村組織のNPO法人化で、やっと長年

の夢が実現しつつある」
▽同「隠居」の庭野ヒサさん(71)「寝たきりにならないよう、幾つまでも元気で生きていきたい」
▽大学卒業後、東京での就職内定を辞

退し2月に移住した坂下可奈子さん(24)「農業をしっかりと覚えて、質を落とさないよう山清水(やましみず)米を作りたい」
▽4月に1年間の期限付きで移住した

が、その後も村に残ろうと決めている小佐田美佳さん(25)「この地で結婚して子供も欲しい。いろいろな形で村に関わっていききたい」

▽昨年2月、「地域おこし協力隊員」として妻子と移住した多田朋孔さん(33)「池谷の存続だけでなく自給自足の生活も達成したい」